

深田久彌●山の文学全集

雲の上の道

80
ア

監修

小林秀雄

井上靖

三田幸夫

今西錦司

深田久彌●山の文学全集
VI

雲の上の道

朝日新聞社

深田久彌・山の文学全集 VI

雲の道

全十二巻 第三巻 雲の道

1974年

発行 昭和四十九年九月二十一日

著者 深田 久彌

著作権者 深田志げ子

装幀 原 弘

発行者 岡見 璋

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

© Shigeko Fukada 1974



深田久彌・山の文学全集 VI

目次

雲の上の道——わがヒマラヤ紀行……………七

出発まで

九

カトマンズまで

三〇

ベース・キャンプまで

五七

ジュガール・ヒマール

五八

ランタン・ヒマール

三三

帰途

一四

ヒマラヤ——山と人……………七五

山村マナングボット

一五

忌わしい雪男

一八

エヴェレストと酸素

一九

ジョージ・リ・マロー

二三

エヴェレストあれこれ

二五

Because it is there. (三二) エヴェレストと文学 (三三) エヴェレス

トの歌 (三五)

登頂年代記

二五七

小エクスペディション

二六七

単独登山者

二七

高所ポーター

二九

悲運の登山家

三〇九

シェルパ列伝

三六

ナルサン (三六) トップゲイ (三八) アンツェリンⅡ (三八) ジグミ

Ⅰ (三〇) チェタン (三三) レワ (三三) パサン (三四) パサン・キク

リ (三六) アンツェリン (三三) キタール (三三) ダワ・トンジュッ

プ (三三) アンタルケー (四二)

ヒマラヤの墓碑銘——山から還らなかった人々

三四

エヴェレスト (三四) K2 (三七) カンチェンジュンガ (三六) ナン

ガ・パルバット (三四) ナンダ・デヴィ (三七)

あとがき

三七

ヒマラヤ随想……………三七七

ヒマラヤの旅から……………三七九

ヒマラヤ遠征五十万円説(三七九) ヒマラヤン・クワルテット(三八五)

新聞を見なかった三カ月(三八九) たった五本のヒマラヤ撮影(三九〇)

ヒマラヤと双眼鏡(三九三)

ヒマラヤの時代……………三九六

ヒマラヤへ志す学生諸君に(三九六) ヒマラヤの女性登山家(四〇〇) ヒ

マラヤの国際友誼(四〇七) 大ヒマラヤ展を見て(四二〇) 私のヒマラ

ヤ十年史(四二二) 鉄の時代(四二九) ヒマラヤと電話(四三四) 世界の山

にいどむ日本山岳人(四三七) ヒマラヤのスキー(四四三) エヴェレスト

登頂以後(四四三) ヒマラヤの地図(四四四)

ヒマラヤの先輩……………四五三

ジュール・ジャコ・ギャルモ(四五三) G・O・ディーレンフルト(四五六)

マルセル・クルツ(四五六)

深田久彌・人と作品(六)

解題

近藤 信行……………四六九

中馬 敏隆……………四七九

雲の上の道

——わがヒマラヤ紀行——

出 発 ま で

ヒマラヤン・クワルテット

すべての道はローマに通ずと言うが、すべての登山家の夢はヒマラヤにつながっているだろう。私もそうであった。私の夢は特別強かった。終戦後数年の田舎暮らしに、私はヒマラヤの文献に耽読した。そしてヒマラヤへ行かない先に、もうヒマラヤの本を二冊も書いた。

一昨年（一九五六年）出した『ヒマラヤ——山と人——』

のあとがきに私は書いた、「ラマンチャのドン・キホーテは騎士物語を耽読しすぎて気が変になり、冒険遍歴に乗りだしたそうだが、私にもその傾向がないとは言えない。なに、私といえどそう老いたわけではない。（中略）もはや八千メートルの氷雪の壁を攀じるのは無理であろうが、ベース・キャンプから二つほど前進キャンプを設

けて頂上に達しられる七千メートル前後の山なら、ひょっとして私ごときでも初登頂の喜びを得られるかもしれない。いや、それも無理なら、五千メートルくらいまで登って、永遠の山の姿を眺めてくるだけでもいい」

それから昨年（一九五七年）出した『ヒマラヤ登攀史』のあとがきにも私は書いた、「万一この本がよく売れてもしたら、それを旅費にあてて私もヒマラヤへ出かけようと、あらぬ夢を見ている。相棒は本書に挿絵を描いて貰った山川勇一郎君である。二人が会えば話はヒマラヤのことになって、あれこれと計画に余念がない。実現出来なくても、夢はたのしいものである」

ところがその夢が実現した。全く、事は当たってみるに限る。私がヒマラヤへ行けるなんて、誰が信じただろう。私自身でさえも。それは今までのわが国のヒマラヤ遠征隊を見ればわかる。それは長期間の慎重な準備を要した。隊員には体力の充実した勇敢なクライマーが厳選された。そして莫大な金がかかった。大きな組織力を持った日本山岳会とか、伝統のある大学山岳部でなければ、ヒマラヤへなど行けないように思われていた。

私ときたら、何のバックもない、ただ一個の山好きに過ぎない。登山家としての技能を証明するような過去の

業績もない。それに私はもう年を取りすぎている。五十五歳だ。気は若い、山では老兵である。それより何よりそんな金がどこから出るか。貯えどころか、いつも月末の算段に悩まされている私ではないか。ただ一つ、誰にも劣らないと思われたのは、ヒマラヤへ行きたい一心であった。この熱意だけが私をヒマラヤへやらせてくれたのだ。

私はまず山川勇一郎君を誘った。一水会の会員で、故安井曾太郎の愛弟子であった彼も、山好きの点では私に劣らない。しかしヒマラヤ行の資格では私と大差なかった。私より勝っている点がありとすれば、

「いざとなりや、安井先生の絵を売りますよ」

最後の財源を確保していたことだ。彼は恩師の遺作を秘蔵していた。もつともそれを手放すくらいなら、どんな金の工面も厭わ^{いと}ない忠実な弟子で彼はあった。身体が大きく、ノソツとしていて、しかも細かな神経を持っているこの絵描きさんと、私はもう二十年以上のつきあいだった。初めて山で出あったのは、彼がまだ美校の生徒の時だった。たった一人で山へ来ていた。その後、偶然にも彼の祖父母が私の故郷の町出身であることを知った。私とウマが合ったのも、同郷者の血が流れていたせい

かもしれない。

私が山川君とヒマラヤ行の相談をしていた頃、彼はその前年スキーで折った脛^{すね}の骨に、まだ針金を入れていた。四つに折った骨をつなぎ合わせていたのである。その針金を抜いたのは、出発の二た月前だった。彼はその足を訓練するために、大きな身体をキャシヤな自転車に乗せて、大森の自宅から世田谷の私の家までよくやって来た。二人の話はいつもヒマラヤに移った。しかし空想力は豊かだが実務には疎い作家と画家では、この夢のような計画のどこから切り崩して行けばよいか分からなかった。

二人に出来たことは、まずわれわれのヒマラヤ行を知人友人に宣言することだった。これは私たちのような尻の重い者には有効な方法であって、「あいつは口ばかりで、ちっとも実行しないじゃないか」という非難を甘受しないためには、どうしても立ち上がらねばならない。つまり一種の窮地に自らを陥し入れる、発奮しようという方法である。

この宣言を伝え聞いて、私たちの仲間へ入ってきたのが風見武秀君であった。私はまだ彼と山行を共にしたことはなかったが、山岳写真家としての腕前はずっと以前から知っていた。彼のすばらしい雪山の写真は、また彼

が優秀な登山家でなければ撮り得ないことも証明していた。私は喜んで彼を迎え入れた。それは昨年（一九五七年）の十月末のある夜、銀座裏のおでん屋の二階で私は初めて風見君と会い、そこでヒマラヤ行の計画を語りあった。誰しもそうであるうが、夢中になってヒマラヤ行の話をしていると、すぐにも行けそうな気がしてくるのである。その夜私たちもすっかりそんな気になって、おでん屋を出てからなお二、三軒飲み歩いた。その間に私の感じたことは、風見君とは練れた人だということ、それから豊富なユーモアを持っていること。彼が優秀な写真家であり登山家であることは言うまでもないが、四ヵ月も毎日同じ顔をつき合わせるヒマラヤ旅行では、それだけでは足りない。メンバーの和合に耐える人が必要である。私は風見君と会って、いい伴侶を得たと感じた。

私と山川君との二人の呑気坊主ではどうにもならなかった重い車輪が、風見君を得てやっと動き始めた感じだった。彼の山岳写真に見られる芸術的感覚と同時に、風見君は銀座の真ん中で写真材料店を経営するだけの実行力を持っていた。その後、私たちの準備が軌道に乗ってからの話であるが、私たちはどれほど彼の実務的手腕に頼ったか知らない。人なつこい柔和な眼差しをした小

柄な彼は、仕事にかけては実に敏捷であった。彼を得なかったら、私たちの計画はこんなに順当には行かなかっただろう。

こうしてメンバーが三人そろった。作家と画家と写真家。しかしまだ機は熟さなかった。私たちの決心は堅かったが、具体的には一歩も踏みだしていなかった。その間に、山川君は脛の骨の針金を抜いた。風見君は入院して腹の中の胆石を取った。二人ともヒマラヤへ行く前に身体の故障を除いたわけだが、除いたものが針金と石であるところが変わっている。山川君は四十八歳、風見君は四十三歳、ヒマラヤ遠征隊としては珍しい中年者のパーティである。

このメンバーに医者を一人加えようと私が考えたのは、何も私たちの健康をおもんばかったからだけではない。今まで私は多くのヒマラヤ登山隊の記録を読んで、その中にたいいてい医者が参加していること、そしてその医者が現地民を診療することによって、多くの便宜を得ていることに留意していた。現地民は診て貰ったお礼に鶏や卵を持ってくる、とするとわれわれのキャラヴァン中の食費が助かる、そんな虫のいいことも考えていた。

そのドクターの候補として、私がほとんど躊躇なしに

思いついたのが古原和美君であつた。古原君とは知合いになつたばかりだつた。その年の十月、私は信州の大町で初めて彼に出あつた。そして古原君夫婦（奥さんも登山家である）と私たち夫婦と、それに山川君を加えた五人で、紅葉の盛りの乙見山峠を越えた。その楽しい思い出が残っていた。

古原君は熊本産、旧五高から熊本医大卒業の医学博士である。山の好きなことでは学生時代から徹底していて、山登りに結びつかないような学問はやらなかった。初めは地質をやるうとしたが、医学に変わった。大学では高所衛生の研究をしたという。彼の山好きはさらに嵩じて、ついに熊本の家を売り払つて大町に移住した。彼をそこへ引きつけたのは、大町保健所長というポストではなく、北アルプスのお膝元というそのポジションだつたに違いない。実際、彼の家の前から、後立山連峰がズラリと見渡せた。その家というのは旧警察署長官舎で、広い住居の他に、柔道場と留置場とが付属していた。夏冬の休暇に、はるばる九州からやってくる山の連中は、古原君の家をあてにした。いくら大勢来ても、寝る所には不自由しなかつた。

医学より登山の方に熱心なこのドクターに、私がヒマ

ラヤ行の誘いの手紙を出したのは、もう年もおしつまつてからであつた。彼からすぐ速達の返事がきた。封を切るまでもなく私には中身が推量された。それにしても、こんなに不意な申し出に対して、こんなに早い承諾とは！ しかも「私の身辺の事、たとえば四ヵ月の休暇の事、軍資金の事等については、今の処別にさしさわりはありません」と書いてある。何と羨ましい身分だろう。いや、ヒマラヤ遠征に彼はいつもそんな心がけて待機していたのに違いない。

かくして四人のメンバーがきまつた。大勢の志望者から択りすぐつたものではない。偶然寄りあつたようにみえる。しかし決して偶然ではない。私たちのパーティとしてこれ以上の四人が望めようか。ヒマラヤ行のメンバーには、同じ傾向の人の重複を避けた方がいい、と私はかつて読んだことがある。幾ヵ月も朝から晩まで顔をつき合せている生活である。ことに高い所へ登ると、酷薄な高度の影響が人間の心に作用を及ぼして、妙にいらいらしてくる。つまらないことが争いの種になる。そんな時一番敵になり易いのは、同じ傾向の人、わけて同じ職業の人である。ところが私たちは四人とも仕事を異にしていた。性質も違つていた。四つの血液型をそれぞれ

私たちは分担していた。甲の長所は乙の短所を補い、その逆もまた真、という関係になっていた。競争意識の種となる年齢も、五つ六つほどの間隔を置いて、平和を保てるようになっていた。三十五歳の古原君が入ってきて、私たちの平均年齢は四十五歳に下がった。私たちの絃は調和を保ちながら他の絃を犯さなかった。私は心ひそかに私たちのパーティをこう呼んだ——ヒマラン・クワルテット！

プ ラ ン

私の前からの憧れはランタン・ヒマールであった。そこへ私の心をそそったのは、ティルマンの本である。大戦後、ネパールが多年の鎖国を解いて外国人に門戸を開いた時、最初に乗りこんだ登山家がティルマンであった。一九四九年と一九五〇年との二回の山地旅行記を、彼は『ネパール・ヒマラヤ』という本にして出した。おそろく終戦後最初のヒマラヤの記録であっただろう。そしてこの記録が、その後の日本のマナスル登山のきっかけにさえなった。

ティルマンの愛読者である私は、いち早く『ネパール

・ヒマラヤ』を入手すると、夢中になって読んだ。ランタン・ヒマールを知ったのはこの時である。ティルマンに続いて、一九五二年スイスの地質学者ハーゲン博士がランタン・ヒマールに入った。その報告は簡単であったが、私の憧れに油をそそいだ。博士はランタンの谷をヒマラヤで一番美しい景色の一つに数えていた。谷の上流には豊かな草地が展^{ひら}げて、高山植物が咲き溢れ、背後に高い氷雪の峰々がそびえている、というのだから、想像するだけでもこたえられなかった。

私のごときはもうヒマラヤのジャイアンツに取り組もうという大望はなかった。この世ならぬヒマラヤの美しさに接するだけで冥利に尽きる。登山家や探検家でなく、一介のロマンチックな遍歴者で十分である。ただ私の心中にひそかな望みが一つあった。それはゴザインタンである。ヒマラヤ八千メートル級の最後の峰であるゴザインタンは、いまだにその所在位置がはっきりしていないかった。ネパールとチベットの国境から一六キロも北方のチベット領内にあると言われ、またそれは誤りで、国境の山脈上にあるのだとも言われていた。この謎を解こうとしてティルマンはランタン・ヒマールの氷河を幾つか詰めたが、天候が悪くて望みを果たせなかった。ハーゲ

ンも同じ目的でランタンの谷から一つのユルに取りつき、そこからゴザインタンの写真を撮って帰った。ゴザインタンの山容を伝えるものとして現在発表されているものは、そのハーゲンの写真きりである。もし私たちがゴザインタンに近づくことが出来たら、それだけでも新しい収獲となるだろう。ヒマラヤ地誌に一つの貢献となるかもしれない。——結局はそれが出来なかったのだから、あまり大きなことは言えない。しかしそんな希望がランタン・ヒマールにあったことだけは事実である。

ヒマラヤのどこへ行くか。プランは私に任せられていた。私がランタン・ヒマールの他に、その東に続くジュガル・ヒマールを選んだのは、イギリス婦人隊の登山記『雲の中のテント』を読んだ結果であった。ジュガル・ヒマールという名前は、ティルマンの『ネパール・ヒマラヤ』の中で知っていた。ティルマンはジュガル・ヒマールには入りこまなかった。ただ眺めただけである。そしてその山のふところへ入る道はない、とあつさりあきらめていた。

ついでに注釈をすれば、この何々ヒマールのヒマールはどんな意味かというに、ヒマールはヒマラヤと同義だが、ネパールでは、ヒマラヤを細分してその個々の山脈

や山群をヒマールと呼んでいる。マナスル・ヒマール、ガネシュ・ヒマール、ランタン・ヒマール、ジュガル・ヒマールというふうに。たとえば飛驒山脈（北アルプス）の中に、常念山脈や立山連峰があるようなものである。

ジュガル・ヒマールに最初に入った登山隊は、一九五五年のイギリスの婦人隊であった。女性だけでヒマラヤへ出かけたのも、これが世界で最初だった。メンバーはわずか三人、しかも未知の山城へ入り込もうという。初めは彼女等も反対された。山へ到着するまでに、山賊にひどい目にあわされ、略奪され、殺されるかもしれないぞとさえおどされた。また山を歩いていて肝心かなめな時に、ガイドたちに置き去りにされたらどうするかとも忠告された。しかしそんなことは何一つ起こらなかった。彼女等は山地民と親しく交わり、安全な旅行をし、そしてジュガル・ヒマールの一無名峰に初登頂という輝かしい功績をたてた。

その時の紀行が『雲の中のテント』である。さっそくそれを取り寄せて読んだ私は、彼女たちの勇敢さに打たれるとともに、ジュガル・ヒマールに強く惹かれた。その本の中には、私たちのような小バーティを誘惑するに十分な好餌が撒かれていた。彼女たちは約六七〇〇メ